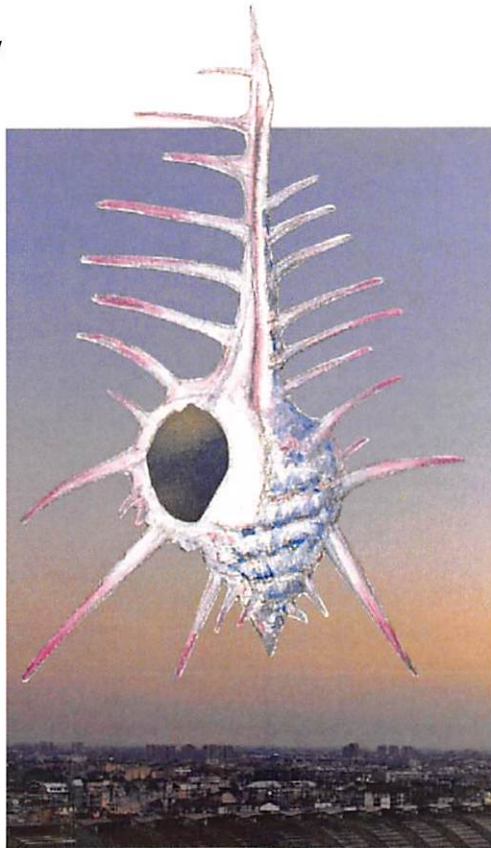


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 4



令和3年4月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第4号

No.755

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二二年 四月号 (通巻七五五号)

◇今月の二十首詠……春を待つ

桃原佳子 2

■作品A

坂上直美・坂出裕子他 4

A 酒井 牧他 18

B 酒井綾子他 56

C 首藤悦子他 68

A 村石けさ子他 82

■オリープ集

高橋啓子・冨田鈴子 44

◇今月の二人

萩原嘉津子・藤井純子 14

香川進の生きものの歌 30

田土成彦 43

私と短歌との出会い(224)

鈴木剛之 17

●追悼・柏原宗一

柏原宗一作品三十首選

奥田陽子 34

追悼文

川島貞夫・福田庸子・小野雅子
藤森巳行・三好聖二・加藤はるみ

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】木村文子

54

■地中海の青春時代

思い出すままに

市野千鶴子 40

■遊覧香港

〈リルケと私〉

本元由美子 50

■歌壇月旦

コロナの年

西堤啓子 51

◇送風塔

樋口淳一郎・山合邦子 52

■二月号作品批評

A……………藤田美智子・潮田千代 74

高橋啓子・根岸 亮

B……………植田和子・宮本靖彦

C……………中村博子

オリープ集……………大浪美雪

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

〔編集部〕 73

クリップ……………98

神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyga

春を待つ

桃原 佳子

マスクして手袋はめて靴を履き目深の帽子表情よめず

聞こえくる話し言葉をつなげれば「コロナ禍なれど明るく暮らす」

九カ月の空白埋むる九十分琉球舞踊の所作蘇る

わが背丈五センチ程も縮みしか物干し竿の高きに爪立つ

色合いの程ほどよ好きところ縁側に立ちて懇ろに干し柿を揉む

蕾まだ固めの牡丹は十二月の異常寒波に真向かわんとす

年の瀬の家事を夫と分担し五十三回目の正月準備す

大晦日の夜はしんしんと降る雪と炬燵に応うる昔の話

昭和二十年生まれ。

平成十二年、地中海入社。

沖縄の会・しらぬひグループ所属。

ほぼ全てスマホの中に世界あると老若男女密かなブーム
良い年か悪い年かわからねど拝みている元日の朝

駅伝の駒澤は創価を抜きてゆくテレビの前に座り続ける

細切りの大根を干す吐く息のひりひり口に戻りくる朝

朝空を制圧する如く野鳩の群れ帯状に飛び交いており

あさみどりの麦の芽は揃えども厳寒の日々田圃もさびし

頬を打つ風は強くて冷たくて歩む小徑に黙すほかなし

朝採りのなずなはこべらずしろと大雑把なり七草の粥

生きることは食べることなり食べ物廃棄処分の多さに驚く

時々雪降る庭に春を待つ雀三羽が餌をあさりゆく

外出も稀になりたる現し身をかこつ慰めか長き電話

ほんのりと鉢を温める陽射しありブーゲンビリアに水やりをする

作品 A

坂上直美

君なき冬

・天

ゆえ知らずさびしさふっと胸に湧く冬の曇り日午後四時の部屋
いつか来ときと春来と待ちており君なき真昼窓の外は雨
初弘法・初天神もなしという令和三年静かなる京
寒紅梅咲き初むという便りあり凍る心も少し溶けゆく
告げやらむ君が鼠肩の力士宇良初場所好調十勝を挙ぐ
告げやらむ君なき日々を恙なく家居を清め寧く暮らすと
久々に着物をまとう帯キユツと街に出でなん春近き日に

坂出裕子

鶴

・洛

北国ゆ渡り来たりし鶴ならむ水面みなもしづかに羽を浮かべて
長旅の疲れ癒やすと川の面に静かに白き羽を浮かべて
あたたかき冬陽を浴びて鶴の子は泳ぐともなし澄める川面に
数十羽群なし浮かぶ川の面にあたたかく差す冬のひかりの
みつづみに冬を越さむと飛び来たる鶴か旅路のをはり近づき
群れをなす鶴が静かに飛び立てり鳥のやさしさ残る水際みぎはべ辺
残りるものはなきかと見回して飛び立ちゆきし鳥は親かも

佐久間 晟

空

・湾

日々の生活に不満もなく暮らしている時には傍きわれを寂しみ
いつしかに卒寿も半ば老いという悲しき言葉を吐くこともなく
既にしてすべて諦めの思い持ち空に広がるあかね雲仰ぐ
空遠く湧き立つ雲に思い馳す山奥深くに求めし山毛榉も
面影は誰彼となく現れてこの世のわれに何か言いたげ
夕影はわが禿頭を照らすらし曾孫が寄り来て可笑しきか笑う
もう夏か為すこともなく季は経ちこの無氣力を思うも哀し

佐藤道子

嘆き

・甲

ひとり身の友に嘆きは告げられず夫逝きしこと一人噛みしむ
夫の食事私の隣に用意してお下がり頂く習ひとなりぬ
音楽を知らねば「詩経は難しか」と夫はふるすを私は二胡を
研究の助けになればと買ひし二胡夫亡き今のよすがとなりぬ
返事なき賀状幾人友人の無事を祈りぬ皆老いぬれば
ひっそりと一人の散歩もマスクするエチケットとは金縛りに似て
国防婦人会のたすきと真白き割烹着コロナのマスクに重なりて来る

鈴木結志

脱炭素元年

・福

免疫を利用新たなガン療法本庶佑が道をひらきぬ
ニュートリノ観測成功世界初小柴科学に徹してぞ近く
苦学してスピロヘーター発見し世界に名上ぐ野口英世ぞ
組織委が五輪サイバー防衛のホワイトハッカー養成必死
学習の向上計る新書とうポプラディアに眼をひらく
銀河系ブラックホール新発見太陽の四百倍とう天体のなぞ
「脱炭素元年」自動運転の空飛ぶ自動車はよ生るるを待つ

関根榮子

公園

・埼

昼過ぎの散歩に出でしちらちらと花びらのごとき雪降りはじめ
公園の見えるてくる頃雪止みて銀杏の巨樹に日の射しはじめ
さざざと砂場に入りたし誰も居ぬ公園をいつものように横切る
節分の豆を持ちくれし友のいて長話する日ぐれの門辺
ようやくに朝の卓子に日の射せり待ちていたりし立春の光り
買物は言われなくとも意のままに見てまた触れてひとりに限る
巢籠りは鳥のみに相応うよ名曲の「鶴の巢籠り」思い起こすも

関根和美

本社への道

・埼

ひととせを行かぬ本社の引き出しのお茶の葉いまま緑たもつや
矢の根寿し閉店借しめどコロナ禍の前なりつまりは救われしならん
一杯のコーヒーをよるこびくだされし京成社社長の笑顔なつかし
神田駅西口どおり活気ある店ひしめくも交転はげし
語りつつ共に歩みし幾人のでに喪う本社へのみち
ああもとに戻れるだろうか何事もなかったようにかつてのように
洪沢栄一大河ドラマに進出しお札になるころ変わる何かが

高尾恭子

カツラ揺籃

・大

ジョーカーを使い損ねて夕暮のふるさと馴染みの麵屋をさがす
グーグルのマップ片手に一万歩あの道まがれば黄泉の坂道
びかびかの裕子嬢との六十年田中が山田にかわったけれど
おとしの杉の倒木ほっかりと森は実生のいのちを兆す
キャラメルのような香りに百年を眠りつづけよカツラ揺籃
ストールに首すくめつつ「おらおらでひとりいぐも」田中裕子のように
追憶の舌っ足らずの冬の風ジュリーの白いストールなびく

高津砂千子

コデマリ

・風

日照^{モト}雨降る朝の庭面をつつきいる目白の羽の黄みどりさやか
表情の乏しきひとと別れ来てやさしくなびくコデマリ求む
寒き日の続きようやくチューリップの固き芽のぞくすみれのかげに
迷い込みしビルの谷間を右ひだりゆきつ戻りつ睦月のおわり
ひと本の棒となりはて冬を越す被爆アオギリ見る人のなく
取れたての若布をお湯にくぐらせて一品とする立春の宵
ふき味噌をご飯にまぶしふうふうと食ぶるあしたの空晴れわたる

滝田靖子

二月

・新

突然に夫を喪ひし同僚の身体が声か震へてやまず
初めから居ない人なら喪ふといふ絶望も無縁だらうが
絶望を補つてなほ余りある幸福ありしとどの口が言ふ
医療者を聖職者と言ふ馬鹿のゐて退つ引きならぬわれらの日常
聖職者だから休まず働けといふのか自死を唆すやうに
開け放つ窓の向かうはずでに闇どうしてこんなに父に会ひたい
父が吾が生まれし二月君の師が君が逝つてしまひし二月 雪雪雪

竹下 妙子

なづな

・霧

あさほらけ葱の束さげ持ちくるる友の笑顔に陽ざしこぼるる
枯草に混じりてみどり淡き葉の春呼ぶなづなやさしく摘めり
ひとひらの枯葉に射しし夕茜たちまち闇の色に染まりぬ
かなしみの昂りおさへ寄る窓の闇を斜めに星が流るる
就寝のまへなるわれに焰あり共に消しゆく燃ゆるストーブ
形ある物にはすべて命あると教へられしよ幼き日より
ありし日の母の孤独に触れざりし霜深き夜の底ひに思ふ

田土 成彦

湯たんぼ

・宙

湯たんぼの湯を沸かする午後十時明日の予定の無いを確かめ
たぶたぶと湯が揺れ運ぶ湯たんぼの温みは今日の一番の幸
土踏まず湯たんぼに当て寝ぬる夜をほのぼのと母の夢を見てをり
明け方の湯たんぼに残る温もりをわが分身のごとくかなしむ
眠ることが出来る幸せ明日の朝起き上がったらさらに幸せ
エアコンの設定温度一度上ぐ今宵木枯らし窓に激しき
詠まなくてもよいやうな歌詠みたして今月詠草七首まとまる

田土 才恵

間欠泉

・宙

またたける星に向かえば悲しみは溢れるだろう泉となりて
吹き上ぐる間欠泉のかなしみを冬野に曝す湖のほとりに
間欠泉噴き上げしのちの寂しさを冬野は曝す惜しむなきひかり
一瞬の出合いの不思議小雨降る夕暮れの道選びしことも
いきいきとひとり暮らしを樂しめる八十路をとうに越えたるきみの
高橋一生好きだといひし横顔にふとよぎりゆく優しきおもざし
吹きあぐる雄叫びひとつ闇に消え冬のしじまに星はまたたく

玉井 綾子

灯り

・羊

青になる刹那踏み出し先頭で横断歩道の白切り拓く
交差点手前の止まれの「れ」の文字がめくられて動きニヤアと言う夜
交差点信号全て赤になる瞬間審判されている道
投光器の射す部活動 指導者の語尾が灯りの外へ跳ね出す
高層ビル赤色灯のバラバラな点滅をタクシーの窓に見る
高速の下、黒壁に「OPEN」のネオン管あり灯らぬままに
濃霧の夜 透過の力失いしガラスに映るわれに顔なし

虎 谷 信子

節分会

・伴

節分に まく豆枿に香りゐる。煙がへしの梁にも うたむ
節分にまく豆のかさ 減りたれど、心を込めむ 古き枿なれ
家うちの豆まきすませ 外蔵まで、まきぬし父の 声よみがへる
豆をまく部屋減りたれど 立春の来よ。そぞろ明け初む
立春と云ふには 寒し。水仙を活けかへし土間 雀入り来る
冬の猫いだけば やさし 夜をききむ、目覚めにをるも習ひともなく
白猫は赤き首輪が 似合ふとぞ 唯言交はず。ひとり居もよし

中 島 央子

柿

・森

となり家の取り毀されて年々としとしに実りし柿は道連れとなる
一本の柿に移らふ四季のいろ失せし寂しさ問ふこともなし
街路樹の公孫樹かがやく時惜しむ歩む足許九十歳の生
そちこちに無人となりし門を過ぎ面輪の浮かぶ夕への散歩
上昇をつづける飛行機目に追いつたたびの旅の記憶をのせて
冷えしるき朝の目覚めにすり寄れる犬のあたまのほのあたたかし
冬背き君子蘭に陽のさして輝きを増す部屋の一隅

中島 義雄

アマビエ

・岡

アマビエとふ得体の知れぬもの画きて年玉の増額を祈る児のあり
 もしもしと呼べば亀よと応へくる血を繋ぐ児よ歌詠みとなれ
 鉄板焼きに削り鱈を踊らせてわれは未だに酒の味を知らず
 もの味じつくり知れどたちまちに足れる齡とわれはなりたり
 刃のやうな月が照らして薄紙のやうに震へる己れが独り
 人生の皺のごとくに書きて消す人名帳にふるさととは在り
 音絶えし彼の世のごとく雪は降り人悼むうた類型となる

永塚 節子

チャイ

・銀

夕つ方またも立ちいるあおさきは山王川の主なるらん
 漂鳥の名前返上この川を住処となせる一羽のあおさき
 半日といえども仕事帰りきて温きチャイを胃の腑に充たす
 初めてのチャイを飲みしはスリランカ給仕の青年跣でありし
 新しき年への祈りと購いし椀の組板くりやに香る
 嗅覚を確かめるかに組板に顔近付ける 今日仕事なし
 ことのほか寒き冬にも次つぎと花を咲かせるブルーデージー

白子 れい

われの幸せ

・洛

今年またおせち料理を持ちくるる昔の教え子独りの吾に
 教えしは四・五十年も前なるに未だに吾を気づかいくるる
 仕事もち母親見守り孫のある忙しさにありてなお吾までも
 淡路島に嫁ぎし教え子コロナ禍に今年は帰れずと菓子贈りくる
 あの人にこちらの人に見守られ支えられいるわれの幸せ
 五十年教壇に立ち続けたる吾のひと生に悔いはあらざり
 コロナ禍に人は籠るも庭の花臘梅・椿・水仙華やぐ

ばばりょうこ

笑うほかなし

・鹿

鉢植の幼き楓わが庭にもらい受け早や少年となりぬ
 或る日ふと気がつきたればほの紅く色づきいたり青年のきざし
 酒好きの男よりいただきし汝なれば壯年となりて紅酔うらん
 三人の泊りの部屋にもんもんす いびき・テレビに 睡眠薬依存症
 傍らのデンデン太鼓に笙の笛ぬむれぬゆえよし 笑うほかなし
 窓をあけ空を仰げば月燦とひかり放ちて星を拒みぬ
 残月は忘れられたる御褒美のごとく貼りつきあえかなりけり

浜谷 久子

河原

・地

伐採の河原を彷徨う鴉あまた今は見えない木立の上を
 切り株の続く河原一本の木も無く雀が枯れ草を飛ぶ
 幾日を離れぬ鴉かたわらを護岸工事のシヨベルカー動く
 切り株の面を照らす寒日差し護岸工事の滞るなく
 シヨベルカーが運ぶブロック土芝生分厚い土手の築かれてゆく
 切り株を白く乾かす寒日差し止まない風におおられながら
 分けられて積まれる太い幹と枝木立の幾とせ鳥の幾とせ

浜本 芙美

今朝も

・夢

新聞の「今日の運勢」必ず読むあてにならねとおもいつつ今朝も
 声のトーン高めのわが声聞き取りにくいとかつて友のいいしを思う
 子供番組「西遊記」をたのしみぬわれの判らぬ映像パスして
 男性群背広をきちんと着る傍ら半ば露出のタレントひとり
 短歌雑誌になつかしき友の作ありて電話をかけたなり声は変わらじ
 最近まで買い物にゆきし商店街思い浮かべ冬籠りする
 さ庭の草刈ればシクラメンの植木鉢現れきて赤き花咲く

檜垣美保子 空

・昂

帆をあげてゆきたきほどのきさらぎの風の青空かもめはばたく
ひさびさに聞きし一語「萬天原」はれわたる空のかなたを見つ
楓の木の冬の梢におおき風捕われ吹かるる長き片足
さいかちの木に添え木あり「ひこばえを育てています」の立札もあり
にんげんの声なきかつての大学 被爆建物の一棟として
ゆうぐれにほそき雨降る土に降る音なくきたるものものやさしさ
見上ぐればこうこうと月ふりむけば高窓に映る月に見られて

福田庸子

奥志賀

・今

奥志賀の冬のはたての青空に伸びゆく機音今も忘れず
奥志賀の雪の斜面を滑りきりし日日には未来を託してあしも
体温の伝はる近き戻らむかコロナが選ぶ二〇二一年
雑木木の上枝に雲のしづまれる安らかにあれ今年のいのち
山肌を受けし光を照り与ふ男体山は産土の山
長男には申し上げたと答弁す菅総理大臣の日本語の中身
連日の国会中継に日本語の不思議な使ひ方耳を離れず

藤田美智子

ぼた雪

・新

「もらひつ子のくせに」の一撃 口げんかに負けて帰しし冬の日ありき
顔つけて泣きし日の母の割烹着 魚と雪のにほひ混じりるき
川底の深くなりゆく紺色の水のおもてに降るぼた雪に
雪空に二羽の白鳥消えゆきぬ呼びあふやうな声を残して
〈復興〉を〈新生〉の語にかへるといふ過去は捨てよといふはたやすく
教室に置かれたるままのランドセル持ち主はとうに二十歳を過ぎる
〈おせんすい〉に代はる呼び名はないものかたとへばへ下口のやうな濁りの

藤森巳行

妻の母校

・銀

人に会ふ機会を避ける日常に髪に毛に髭爪まで伸びる
マスクして怒りを抑へ生きてゆく明るいニュースの少なき日日を
十キロも痩せたと妻は自慢する見た日はまだまだ太目だけれど
妻の母校離島の球児選抜へコロナ禍の中嬉しいニュース
閉山で人びと去りし過疎の島若き球児が希望を繋ぐ
閉山で離島を去りし人びとの心を繋ぐ選抜出場
我が家にも同窓会より寄付依頼健闘祈り振込に行く

船田清子

臘梅の香

・天

へノコ基地 摩文仁の土もて埋めむとぞ 眠れぬ魂の噴く火もあらむ
臘梅の香らぬ街を悲しめば大阪城公園に咲きそるふとぞ
求め来し君の臘梅花を得てふたりの午後を満たせしかをり
雨・寒さカラスはどうも好かぬにや鳴く音ひそめて籠りあるらし
カラスの巢街中の木になく生駒なる森の中にや朝夕の旅
暮れ方の茜の空を夕闇へカラスの一羽声引きながら
正月の松の生け花菊・南天の造花あしらひ色どりを増す

牧雄彦

宴

・大

山裾の大き櫛の夕暮れてそのかげにウイルスの嗤ふこゑあり
二丁目の角を曲がればウイルスのかけがふうつと消えてしまひぬ
ぎんぎんと冬の夕日が沈みゆくいつくにひそむコロナウイルス
人通りなほ絶えぬ夜の街角にコロナウイルスの宴はじまる
自粛自粛の暮らし長引き人は倦む衰へ知らぬウイルスのちから
ウイルスの感染止まらず新春のひかりつめたたく町並み照らす
ウイルスに社会は変はれど年明けて蠟梅は仄かな香りを放つ

松浦禎子

堀割

・羊

宮本靖彦

自肅時代

・凌

大槓の幹は裂けつつ枝を張り小田原城の天守支うる

堀割の水面けり上げ飛びゆけるかもめの群に託すものあり

片足の鳩は目の前を跳ねてゆく住吉堀の白浜の上

コロナ禍にもここは静かに年は明け住吉堀の令和の水面

住吉堀めぐらせて建つ銅門登城の武士馬上にゆれて

山本邸の棚にひそかに納まりし地産のかわらけひと坏の盃

弥生びとの酒席のあかし山本邸土師器のかけらくちびるの跡

松永智子

影

・嵐

三好聖三

落葉貯金

・伊

人の声ひとの足音絶えし夜遠くしづかに除夜の鐘の音

はるかなる闇の鐘の音きき終りひとりして酌むにひとしの御酒

かなしみてこぼししことばかなしみて拾ふことなく年あらたまる

音のなき闇の底なる影ひとつうごくともなし天井しろし

帰りゆく人らの声のとほくなりとほくなりたるのちの静寂

ものの音ひとの声の絶えし夜半もの書くらしき影うごく窓

音のなき夜ふけの闇にさめて見る白き天井壁また白し

三浦好博

国費

・銚

三木まり

ひとつ

・昴

引き籠もり回復せしとふ隣家の息子の真夜のロックは高し

昨年のお通じが新年の朝にありいづれのものにも境界あるか

四十雀のつがひが先を導けり七十雀の二人つきゆく

パフィオとふ鉢花買ひて店出れば「パフィオペディルム」のメモ追ひかけ来

ウイルスも「はい、解りました」と静かにもなるよ緊急事態宣言

国費から出てゐるのだから国策に反する裁判判決出すな

「北風と太陽」さうよコロナ禍に特措法とふ北風が増す

残されしざくろにそそぐ冬の雨自肅にこもる男がひとり

広辞苑片手づかみの重くなり年頭に知るあの世近しと

医院に会ふ友の増えきて受診後にまた別の友年頭挨拶

エアコンの出口に座りナンプレと取り組む妻を見直し眺む

肌蒼き陸月満月中空に会へぬ友らとラインでつなぐ

住みてより三十数年知らぬ街東西南北知らぬ町ゆく

昭和の日。一月尽は六甲山に社友集ひて氷滑りせし

妻も子もわたしも見入る朝ごとの（日めぐりアニメ）の落ち、落とし方

画面にはなじられてなお健気なる平岩紙の看護師がいる

汝の骨はそこらあたりに撒いておくそれで終わり妻殿が言う

畑？いや、異界の口に誘われておのずと鎌とレーキを掴む

やわらかな冬日が及ぶ畑なか百舌と糞糞のあ？うんの会話

母ひとり暮らせる町の雪だよりおのずと妻は電話機を取る

猫たちの落葉貯金のはじまりか口に銜えておのおの戻る

片方の手袋を握りつつたどる丘を越えて海へ行く道

暗い暗い穴底にもがくひととせの穴を見下ろしなお去り難く

歌ひとつひとに届けよ西に住む魂ひとつを乞いてやまない

御代田澄江

駅ピアノ

・茨

たをやかに暮らし受け止めひた深く土地を愛しつゝ友住み馴染む
あざらけく勁く浮かぶは友の姿逢へざればなほ想ひ募れる
駅ピアノ置かれし駅へ誘はれ葉奏れば聴く海眺めつつ
入れ替はり立ち替はり人らピアノ弾く沖合遠く航く船のあり
一陽来福時雨れし空の亦晴れて時節のものを購はむと出でぬ
新年を帰れず逢へざる息子より元朝に受く年賀の電話
すみれ咲くそこのみあかく日の差して寒の空気のぴりりと澄めり

茂木

賦

坂東九番

・埴

参道の葉師如来ののぼり旗はためき鳴るは如来の声か
詣でたる坂東札所九番の三が日過ぎ堂の静けし

吉野家ののぼりの HAPPY GYU YEAR、面白から入つて見るか
文珍が襲名しますと振るまくら名もワク珍と即妙なりき

アサギマダラ高尾山にも飛びまはる食草鬼女聞さういへばある
「尨」といふ文字をみつけたり悲しくも足がもつてよたよたとなり
宝積寺近づく車窓に長屋門発電パネル乗せしが見えくる

もとむらしげと

夕日影

・そ

浚深の土砂露わなる冬の川父なき故郷は母の住む村
いきものの母の夢こそ愛しけれ仔と眠りおり落葉の上
若き芽を伸ばして冬の陽を浴ぶる木植の夢は来る年の花
無聊なる日の寂しさに雉鳩のくぐもる声が哀調を帯ぶ
声たてて妻が笑いし朝の床スマホの中で育つ孫みて
欠札の葉書に知れる逝きし人記憶のなかの破顔一笑
庭に立つわが夕日影ほそながし太く短く生きし人あり

山下雅子

年賀状

・習

なめらかな文字の賀状は律儀なるSさん制服姿の笑顔
これからは老人施設に生きますと決意の滲む文字読み返す
「会いたい」と記す賀状は絶筆に幼馴染のひとり失う
知りつくす幼き日々経て会えぬまま賀状の結ぶ互みの歲月
夫逝きて二十五年ゼミテンの篤き賀状の皆々若し
なつかしくいとしくしばし浮遊せり賀状の語るむかしむかしを
真つ赤つ赤西の空染め日は沈む昔ながらの夕やけこやけ

山野幸司

雪

・沖

初雪に戯るる声に鳥の声混じりうれしき年暮れんとす
雪だるま積まず置かれし雪くれの滴に虹の見ゆ世の中も
降れよ降れ雪に口開け遊ぶ娘等一直線に走りゆくなり
抱きたる孫の黒髪かくわしき足元照らす光になーれ
野の雪に残る足跡鳥けもの野生の息吹きほのかに燃ゆる
雪の中学校行かぬ行けともむ玄関先に娘と孫の立つ
空袍からう孫大手振り学校ごっこ大きな声で

横田敏子

磐越西線

・福

何十年振りの磐越西線か汽車通学の頃よみがえる
西線の上戸の短きトンネルを抜ければ冬の磐梯嶺ゆ
磐梯山の裾野一面雪の原真白き海かと一瞬思う
母の里吾の生れし町猪苗代、伯母との別れに久久に訪う
「記憶力、判断力は合格です」免許更新の認知機能テスト
炬燵にてクリスマスローズの本を繰り気分は春に雪降り続く
ホットミルクのカップに両の手温めてはおっと見上ぐる降り止まぬ雪

吉永惟昭

記憶帳

・熊

年忌なる命日もただ過ぎてゆく父母よ許せや我の老いさま
 記帳なせど矢の光陰に立ち煉み流離の日々を追うてゆくのみ
 読む方はまあ良としてなぞる字の偏や旁の勘違いあまた
 「のど」までは来ている竹馬の友なるに飲み込まざるを得ない会話に
 答案紙朱の添削が「就中」挙手の礼にて貰いし戦中
 広辞苑重きが罪か改訂の漢和辞書ひく侘しき記憶
 春愁や人恋い直せばつりぼつ我が記憶帳消えてゆくから

朝井恭子

皇帝ダリア

・森

塀を越す皇帝ダリア名のごとく庶民われらを見下して咲く
 いわれなき春の愁いとばすこと東南の風ひと日を荒ぶ
 半島を荒々と吹く春一番わが胸底の虚にも鳴れり
 耻を決して生きる性もたず風あらば風に流されてもみん
 北国の美術館なる青年像まなぶた重く無援に立てり
 木犀の香り漂う公園に「アロマセラピー」と己を立たす
 木犀の芳香浴みて来たる身に生れよ清けき短か歌いくつ

磯田ひさ子

孔雀

・森

松を活水水仙を組みますぐなる心ととのふ年あらたまる
 孔雀色のテーブルクロス展げたりコロナ籠り年のはじめに
 日本書紀に孔雀の記述あるといへば幼らしつづつ双手を展ぐ
 新羅より推古天皇に贈られし孔雀いかなる羽展げしや
 われの氣を引き立てようと幼らが百人一首の札を並べる
 恋は「こひ」乙女は「をとめ」と言ひながら取り札の文字探す六歳
 百人一首に打ち興じたる今日のことわが亡き後の思ひ出となれ

市原やよひ

クロッカス

・萬

来る春も会うを願いて植えし花まずクロッカス黄に開きたり
 あ頃は確かに親をやりていた孫の受験の無事を折れり
 コロナ禍の受験は如何にと思ひしも暫くは息を潜めていよう
 受験生は皆同じと思いつつ孫の顔の浮かぶ幾度
 入学卒業節目をコロナに奪われし若者に向く目自ずとやさし
 この歳の母は介護されていた私は夫の介護しており
 子育てに似ると一人呟けり夫に切なく寄り添いながら

大浪美雪

水荃

・森

賜りしドイツの菓子シュートレン味深まるを指折り待つ
 寒き日の厨に会いし青虫よ何処からこしやキャベツ色して
 水荃のあとに響きを聞ける人素数に星を見る人のいて
 吾が髪といずれほおけまされるや目の限りなる真白きすすき
 刈りつめし萩の根方に積りおるあめ色の葉のぬくぬくとして
 上総との境の川辺もみじせり〈千葉六党〉の話聞きに
 カメンライダーと向かい合わせの講演会ホール占むるは小さきライダー

奥田陽子

水の音

・羊

木のむこうさざ波わずかに見えながら流るる水の音に近づくと
 水を透くひかりに沿いて行くあゆみ小さき魚の影をゆかせて
 幅せまく流れ迫る岸辺にて身を貫くことき水の音聞く
 たえまなく流れ去りゆく水ちかく吹かるるままの身を置きており
 見る者の何を清めん行く水の昨日を今日をひたに流れて
 対岸へ渡る飛翔のひくくして木立の影に素早くも入る
 絶え間なく波の洗える石の上飛沫浴びつつ鳥は水干す

小野雅子

嗅覚

・羊

たまごサンド食べたしと不意に思ふなりおせち料理のまだ残りゐて
刈られたる冬木の細き枝ごしに広がる芝の枯れたやさしさ
嗅覚を確かむるためランチあとコーヒーを飲むと話してゆけり
毎日を職場にあれば嗅覚の変化にこころ尖らせてゐる

「日本製」「高品質」の表示あり百円ショップに買へる付箋に
副大統領のファッション次々説かれるファーストレディーのそれをさしおき
聴衆の中に埋もれてSPとおぼしき人の険しき視線

神田鈴子

未治療死

・大

人と会はぬ幾月か過ぎ冬の日を浴びつつ歩む心も冷えて
末枯れたる野道に光るタンポポの黄の色ぬくし風すさぶなか
寒風に耐へて地面に貼りつけるタンポポの生くる力羨しむ
山茶花の盛り過ぐれば水仙の花ひらき初む春を待つ庭
再びの緊急事態宣言も感染止め得ずいつ朝は来る

阪神大震災の惨状まざまざよみがへる三十六年の時を經しいま
「未治療死」ニュースに初めて聞く言葉治療待ちつつ逝きし人はや

菊地栄子

仏の座

・湾

マスク付け見落とすらしも生垣の高きに薔薇と山茶花の紅
背々と冬の畑に群れなすが「仏の座」なりようやく知りぬ
みぎ方に何故に寄りゆく団地道くるま通らぬ夕べとなりぬ
足踏みをしているような歩みなり積もれる雪の靴跡を追う
傘立に昨日忘れし一本の傘のみ残る憤然として

レンコンがなければポテトの銀杏切炊き込みご飯はソーセージ入り
積年の恨みのように鍋蓋に染みたる邪悪磨かんとする

木村文子

見えぬもの

・羊

つるバラの茂りし庭ありこの土地に 今は重機が地をならしおり
庭土の豊かな香りと手触りはコンクリートに覆われてゆく
まなざしは青をとらえる数多ある色ごとごとく空に吸われて
橋の雪きしきし鳴らして渡るとき川のおもてにこんもり雪あり
川底に渦まき水があるらしく時おりひかりがふるふるゆるる
ビニールのカーテンごしの日常に慣れぬ心を入みな抱く
暗れの日の一人の家に加湿器の音のみ聞こゆる静かに聞こゆる

草刈十郎

コロナ禍

・世

コロナ禍に翻弄されし二〇二〇年青き地球はワクチン待てり
マスクずらし一口飲みてまた戻しビールの味もわからず終ひ
マスクして曇る眼鏡で今日も見ゆる日本これからどこへ行くのか
本棚の何を覗くか冬夕焼け短き日々の暮れ惜しむがに
霜枯れや木炭バスを乗客の皆で後押ししたる思ひ出
今さらに鏡にうつるわが頭さみしさつつむ冬帽子なり
コロナ禍のマスク着用山道にそつとマスクを外しゐるなり

國井節子

春まだ遠く

・春

のどかなる大和の大地に降る雪の清しかりけり春まだ遠く
細枝に冬も健気に咲きつづく真紅の木瓜に雪は寄り添ふ
張りつめし瓶の水もやや解けて朱き目高の早も目覚むる
大池の水に馴れたる冬鳥ら水をけたてて疾く近く来つ
衰ふるばかりの足を動かして自転車漕ぐ老の坂道
勝間田の池の回りの散歩道 ふたつの塔は匂ふがごとし
たつぷりと水気を含んだ春日山雨でお流れ山焼き神事

河野繁子 花鶏 雁

方向を定めぬ大群向きを変え形をかえて寒空をゆく
 かわいいと声だすほどにふくらめるアトリの群れの止まる梅の木
 空に見る勢いあらず木に止まり静かに陽を浴び毛づくろいする
 裸木に実りのごとく鳥とまり鬱との折り合い付きたる夕へ
 窓よりの鳥との出会い鳴き声は電子辞書なる声を聞きいる
 陽にはえて黄緑色の鳥と見ゆ昼ればうつつ凶鑑のアトリ
 風の音電話がとらえウオーキング最中の人の風景もらう

小林能子 夕あかね雲 羊

まだ読める書けるとわが眼の不養生われの驕りがいま糺されて
 見栄えわろく古典的の手術と説き給ふこの医師にこそわが眼を委ぬ
 病室に移されてまだ夢のやう指先は厚き眼帯に触れ
 蓋固きボトルの水を欲りつつもナスコルをためらふ夜更け
 窓辺より眩しく望む房縵の岬は三浦に重なりかすむ
 羊たちも牧舎に着きし頃あひか岬をむすぶ夕あかね雲
 東京湾東と西の谷津と谷 北条海上の道もゆかしき

近藤栄昭 消える脚 虹

わがままにカギを壊して抜け出すか足立つ岩礁濡れぬ高さへ
 ワッペンをつければ天下のDRR車こんなに弱いか私の印籠
 脚力が氣力に負ける急登に時間の関数 係数下げる
 うす汗を爽やかかと思ふ標高差余剰の熱は爽やかに飛ぶ
 道の壁薄き黄色は苔の萌ビロードの回廊明るく映える
 先客の声の聞こえる休憩所声のとどかぬ曲がり休む
 右の脚途中で消える遠き虹右股関節ときどきうすく

近藤芳仙 日はめぐる 信

をさまらぬコロナ禍なれど日はめぐり喜寿を言祝ぐメールのとどく
 変異型ウイルスもさらにクラスター発生させてけふ四人なり
 国内の死者六千を越えたと新聞の文字殊更をどる
 期待せしワクチン接種の言はるるも見えない収束 不安がつる
 人くれば避けてゆきかふ日のつづきこのストレスのいやますばかり
 衣料品馬里邑けふは閉店の荷造りをする ひっそり暗し
 月例の歌会さらに六ヶ月通信とする報せけふ出ず

久我田鶴子 うすのろまぬけ 羊

うすのろでまぬけであつた 遊びとは思へぬままにカードをまはし
 ねむりへとすりおちてゆく感覚の午をひとりて転がすばかり
 意を決し献血にゆき拒まれし二十歳よりのち血はわれのみの
 日の当たるときを咲きし花は閉ち奥へ奥へと唾をためこむ
 〈世の中の動きが止まりほつとした〉不謹慎さは言ふに及ばず
 ダンボールにまともて本の返さるる夢から醒めたと言へるがごとく
 デジャビュ ゆきちがひたる言の葉に放されし手の大きさが見ゆ

